館林 里沼

文化庁 観光関応整備事業（地域文化財総合活用推進事業）

日本遺産「里沼」を歩く④

―「里沼のもてなし文化」・旧城下町散歩―

館林市「日本遺産」推進協議会

令和元年度文化庁「日本遺産」認定

里沼（SATO-NUMA）―「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化―

日本遺産
JAPAN HERITAGE

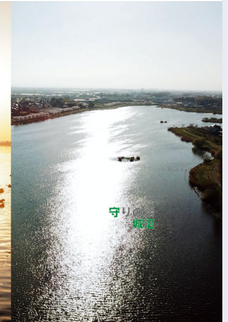
日本遺産とは平成27(2015)年度に文化庁が創設した制度であり、地域の歴史的魅力や特色を通じて、我が国の文化や伝統を語るストーリーを、日本遺産として認定するものです。令和２(2020)年度までに全国104件が認定されています。

《ストーリー概要》

関東の山々が一望できる館林では、今も多くの沼と出会うことができる。館林の沼は人里近くにあり、「里山」と同様に人々の暮らしと深く結び付き、人が沼辺を活かすことで良好な環境が保たれ、文化が育まれてきた「里沼（SATO-NUMA）」であった。館林の里沼は、沼ごとに特性が異なる。その歴史を紐解くと、里沼の原風景と信仰が共存する茂林寺沼は「祈りの沼」、沼の恵みが暮らしを支えた多々良沼は「実りの沼」、館林城とつつじの名勝地を守ってきた城沼は「守りの沼」と言い換えることができる。館林の里沼を辿れば、それぞれの沼によって磨き上げられた館林の沼辺文化を味わい、体感することができる。

【里沼（さとぬま）】

沼は、古代・万葉の頃には「隠沼（こもりぬ）」と詠われ、水辺の草木に囲まれてひっそりとした佇まいを持ち、人を寄せつけない神聖な場であった。いつしか、人々が沼に近づき集う中で、暮らしと結びつき、沼と共生した生業や文化が生まれ、沼は「里沼」となった。里沼は、自然と暮らしが調和した生活文化を今に伝える、我が国の貴重な財産である。新田開発や近代化の波にもまれ、各地から沼が消え去りつつある今、館林では、時を重ねながら、それぞれの特性を磨いてきた、希少な里沼を見ることができる。



里 沼のもてなし文化

「もてなし の心」へと磨き上げられた館林の沼辺文化

❖近代化による「守りの沼」の変貌は、城沼と景観を一つにしていた「躑躅ヶ崎」も大きく変えた。それまで城主によって守られていた「躑躅ヶ崎」は、町人や村人たちの努力によって、公園「つつじが岡」として行楽地に生まれ変わり、400年前に植えられたつつじは貴重な古木群となり、名勝として甦った。多くの人々が訪れるようになった沼辺には、行楽客を迎え入れるための文化が集約され、「もてなしの心」が芽生えた。

❖近代化によって城下町で成長した製粉・醤油醸造・織物などの会社は、内外の客を迎えるもてなしの場として「つつじが岡」を利用した。東武鉄道の開通と館林出身の文豪田山花袋が記した旅の案内書は、沼辺にある「つつじが岡」と茂林寺へと多くの人々を誘った。さらに「実りの沼」がもたらした名産品の麦落雁やうどんは、手軽な館林土産として広く知られるようになり、里沼の特性を活かした「もてなしの心」が根付いた。

❖館林の沼辺に佇むと、赤城山や日光連山、遠くは筑波山・富士山を眺望できる。「祈りの沼」「実りの沼」「守りの沼」、それぞれ特性を持って、多彩な文化を生み出してきた館林の「里沼（SATO-NUMA）」。その特性は明治の近代化以降、「もてなしの心」へと磨き上げられ、館林の沼辺文化として今も受け継がれている。

日本遺産「里沼」構成文化財（旧城下町周辺）

🔍は、日本遺産「里沼」構成文化財の番号です。

㉑ 竜の井・青龍の井戸

未指定（遺跡）

城下町に残る城沼に関わる井戸。竜の井は城下町にあった時の善導寺の境内にあり、女人の姿をした城沼に棲む龍神の妻が、寺の説話を聞いて井戸に姿を消した伝説が残る。竜の井と城沼の間にはもう一つの青龍の井戸があり、徳川綱吉が館林城主の時に、この井戸から女官姿の清瀧権現が姿を現したといわれる。井戸の水は霊水として珍重されてきた。

㉒ 旧館林藩士住宅

館林市指定重要文化財（建造物）

館林城に仕えた藩士の武家屋敷。茅葺き屋根の建物で、館林藩士の暮らしの様子を伝える。屋根の茅は、沼茅（藁）が主に利用されてきた。明治維新後、士族授産による城沼の開発に多くの館林藩士たちがかかわった。

鷹匠町武家屋敷「武鷹館」

㉔ 竹生島神社

未指定（建造物）

江戸時代は城沼の入り江となっていた場所で、弁天が祀られて「浮島弁天」と呼ばれ、明治期に城下町の近江商人によって琵琶湖の竹生島神社を勧請した。境内に昭和初期に行われた城沼耕地整理記念碑があり、低湿地開拓の歴史を物語る。

㉕ 城沼の渡し舟

未指定（無形民俗）

城沼の渡し舟は、明治時代の館林駅開業によって、駅からつつじが岡へ向かう最短ルートとして行楽客に利用された。昭和初期まで竹生島神社脇に「弁天の渡し」があったが、現在は「尾曳の渡し」と「善長寺の渡し」から運航され、７・８月には花ハスクルーズの遊覧船が運航される。

㉖ 小室翠雲画「邑楽公園躑躅ヶ岡之図」

未指定（絵画）

館林出身の画家小室翠雲が、明治28年(1895）に描いた彩色画。「邑楽公園躑躅ヶ岡之図」と題し、城沼とつつじが岡に集う人々が描かれ、明治時代の沼辺景観を見ることができる。

館林市第一資料館

㉗ 旧秋元別邸

未指定（建造物）

館林最後の城主秋元氏ゆかりの和風建築物で、明治末期に城沼を望む館林城の八幡郭に建てられた。主屋に広間があり、離れ座敷に茶室と洋館がある。庭園には沼で投網をする秋元氏の銅像があり、つつじや花菖蒲、モミジなどが植えられている。四季を通じて沼辺文化を彩る、館林の迎賓館としての役割を果たしている。

㉙ 正田醤油㈱旧店舗・主屋［正田記念館］

国登録有形文化財（建造物）

城下町で江戸時代から商家を営む正田家は、「実りの沼」によって育まれた館林特産の小麦や大豆を材料にして、明治６年（1873）に醤油醸造を開始した。正田記念館は嘉永６年(1853)建築の店舗・主屋で、正田家の歴史と醤油醸造に関する資料が展示されている。

㉙ 東武鉄道館林駅

未指定（建造物）

明治40年（1907）に東武鉄道が川俣から足利まで開通した際に開業。駅舎は昭和12年（1937）建築の木造２階建てモルタル瓦葺で、正面中央に時計をはめこんだ意匠が特徴。明治末期から城沼とつつじが岡を訪れる行楽客の玄関口となってきた。

㉚ 創業期日清製粉館林工場事務所［製粉ミュージアム本館］

未指定（建造物）

明治43年（1910）に日清製粉株式会社館林工場の事務所として建てられた木造２階建ての洋風建造物。「実りの沼」によって育まれた館林特産の小麦を原料として、日本近代製粉業発展の歴史を伝える。創業 110 周年を記念して製粉ミュージアム本館として公開された。

㉛ 旧上毛モスリン事務所

群馬県指定重要文化財（建造物）

明治42年（1909）に、城沼を望む館林城の二の丸跡に建設された毛織物工場の事務所で、木造２階建ての洋風建造物。近代館林の産業発展を支え、城沼の守りを生かした工場群となっていた。花の季節には、従業員の慰安でつつじが岡へと繰り出した。

館林市第二資料館

㉜ 分福酒造店舗［毛塚記念館］

国登録有形文化財（建造物）

江戸時代から、城下町で酒造業を営んでいた木造２階建ての商家。建物の脇に「龍水の井戸」と呼ばれる井戸があり、かつて「龍水」という銘柄の清酒を醸造・販売していた。里沼の水源となる良質な地下水により、城下町に酒造業が発達した。

㉝ 旧館林信用金庫［市役所市民センター分室］

未指定（建造物）

大正末期に発足した館林信用金庫の近代建物。昭和９年（1934）建築で、鉄筋コンクリート造２階建て、タイル貼りの外壁や入口の装飾が特徴。大正から昭和初期にかけて町の経済発展を担い、沼辺のもてなし文化の原動力となった。

㉞ 旧館林二業見番組合事務所

国登録有形文化財（建造物）

昭和13年(1938)建築の、芸妓置屋と料理店業を兼ねた「二業見番組合」の事務所。木造２階建ての重厚な瓦屋根が特徴で、２階に芸妓の稽古用の舞台と広間があり、昭和前期の館林の花街の中核となった。花の季節にはつつじが岡で館林の芸妓たちが行楽客を迎え入れ、沼辺のもてなし文化に華を添えた。

㉟ 田山花袋旧居

館林市指定史跡

江戸時代後期に建てられた茅葺き屋根の武家屋敷で、館林出身の文豪田山花袋が、明治初期の少年期に過ごした。花袋は城沼や城跡の風景をこよなく愛し、小説「ふるさと」にはこの家や城沼の景観が克明に描かれている。

館林市第二資料館

㊱ 田山花袋関連資料（田山花袋記念文学館）

未指定（歴史資料）

城沼を間近に望む田山花袋記念文学館には、代表作『蒲団』『田舎教師』などの初版本のほか、原稿、書簡、日記、愛用品など、田山花袋に関する資料約１万点が所蔵されている。展示室には、小説「ふるさと」の自筆原稿と城沼の古写真があり、沼辺を愛した花袋文学の世界へといざなう。

㊲ 館林のうどん

未指定（民俗）

江戸時代に「饂飩粉」（小麦粉）は館林藩の特産として将軍家へ献上されていた。「里沼」と利根川・渡良瀬川がもたらす豊富な水資源が小麦栽培に適した肥沃な大地を生み、長い日照時間と赤城おろしと呼ばれるからっ風による乾燥した気候からうどんの産地となった。“麦都”館林のもてなし文化に欠かせない名産品である。

㊳ 麦落雁

未指定（民俗）

麦粉を利用して作られた麦落雁は、館林を代表する銘菓で、文政年間（1818 ～ 30）に完成して以来、館林城主歴上の栄を賜ったという。城下町に根付いた茶道菓子から発展し、明治時代には「つつじが岡」の園内で館林名産として販売され、沼辺のもてなし文化を彩るものとなった。

㊶ 長良神社と館林城下町の総構え

未指定（建造物・遺跡）

「守りの沼」城沼を要害とした館林城下町の西北端に鎮座し、周囲には総構えの土塁と堀を利用した水路が残る。長良神社は中世から館林とその周辺に広く分布し、祭神の藤原長良が水辺に棲む大蛇を退治したという伝説を持つ。中世・近世の館林地域の沼辺の開発と城下町建設につながる「里沼」の歴史を伝えている。

㊼ 織姫神社と館林紬

未指定（建造物・民俗）

館林地域は江戸時代から綿花栽培が盛んで、農家の副業として機織りが行われ、城下町には多くの綿屋商人がいた。明治時代以降、城下町に織物組合が結成されて町内に織姫神社を祀るとともに、「里沼」のもてなし文化を支えた様々な織物が生まれ、なかでも「館林紬」は今も続く伝統工芸品となった。

日本遺産 JAPAN HERITAGE 日本遺産「里沼」を歩く④
―「里沼のもてなし文化」・旧城下町散歩―

編集・発行　館林市「日本遺産」推進協議会　歴史文化部会（館林市日本遺産プロジェクト）
〒374-0018　群馬県館林市城町３番１号
TEL　0276-71-4111
URL　https://sato-numa.jp
編集協力　一般社団法人TDU建築設計事務所
館林観光ボランティアガイドの会
図版提供　館林市史編さんセンター
写真提供　中山健一
発行日　令和５年(2023) 3月10日

※本パンフレット記載内容の無断転載を禁止します。

SATO-NUMA.JP

1 製粉ミュージアム本館

明治に日清製粉館林工場の事務所として建てられた木造２階建ての洋風建造物。

2 正田記念館

江戸期建築の店舗・主屋で、正田家の歴史と醤油醸造に関する商家・醤油醸造業者の資料を展示している。

3 東武鉄道館林駅

昭和初期の木造モルタル２階建て建築。瓦葺きで、正面中央に時計をはめ込んだ意匠が特徴。

4 竜の井・青龍の井戸

竜の井は城下町にあった頃の善導寺境内に位置した。青龍の井戸は女官姿の清瀧権現が姿を現したといわれる。

5 分福酒造店舗（毛塚記念館）

江戸時代から城下町で酒造業を営んでいた木造２階建ての商家。「龍水」という銘柄の清酒を醸造・販売していた。

6 旧館林信用金庫 <市役所市民センター分室>

大正期に発足した館林信用金庫の旧店舗。昭和初期の鉄筋コンクリート２階建、タイル貼りや入口の装飾が特徴。

7 旧館林二業見番組合事務所

昭和初期の芸妓置屋業と料理店業の組合事務所。木造２階建ての重厚な屋根が特徴で、舞台と大広間がある。

8 旧館林藩士住宅 武鷹館

館林城に仕えた藩士の武家屋敷。茅葺屋根の建物で、館林藩士の暮らしの様子を伝える。

9 竹生島神社

江戸時代は城沼の入り江であった場所で「浮島弁天」と呼ばれていた。明治に琵琶湖の竹生島神社を勧請した。

10 旧上毛モスリン事務所

県指定重要文化財。明治時代に上毛モスリン株式会社が事務所用に建てた木造２階の洋館。

11 田山花袋旧居

市指定史跡。館林で生まれた田山花袋は6歳から14歳までこの家で生活した。

12 田山花袋記念文学館

城沼を間近に望む文学館。田山花袋の生涯と文学的業績をさまざまな角度から紹介している。

13 館林城跡 三の丸土橋門・城沼墾田碑

館林城は城沼を要害とした城で、沼に突き出た台地の地形を巧みに利用して造られた。

14 旧秋元別邸

明治末期に城沼を望む館林城の八幡郭に建てられ、旧館林藩主秋元家との関わりの深い建物である。

15 尾曳稲荷神社

キツネの築城伝説が伝わる神社。北尾重光が描いた館林城絵馬もある。

16 城沼

館林市中央部にある周囲５㎞の東西に長い沼。西岸に館林城が築かれ「守りの沼」となっていた。

17 館林市第一資料館

県指定重要文化財「封内経界図誌」や小室翠雲画「邑楽公園躑躅ヶ岡之図」を所蔵している。

18 長良神社と館林城下町の総構え

「守りの沼」城沼を要害とした館林城下町の西北端に鎮座し、周囲には総構えの土塁と堀を利用した水路が残る。

19 織姫神社と館林紬

織物産業の振興・発展を祈念して建てられた神社。織物会館の一角にあったが長良神社に移転した。

20 向井千秋記念子ども科学館

館林市出身の宇宙飛行士、向井千秋さんを記念して現在の名前になった科学博物館。